

入門化学12

第3章第5節 電気化学

1. 酸化還元反応の起こりやすさ
2. 酸化還元反応とエネルギー
3. 電池の原理
4. 電気分解・電気量と物質量

7月12日課題の解説

- (1) KMnO_4 , MnO_2 , MnSO_4 におけるMnの酸化数を求めなさい。
- (2) CH_4 , $(\text{COOH})_2$, CO , CO_2 におけるCの酸化数を求めなさい。
- (3) 0.5 mol/L のシュウ酸水溶液 10mL を、希硫酸中で 0.1 mol/L の過マンガン酸カリウム水溶液によって滴定すると何 mL で終点に達するか？
それぞれ計算式を添えて解答しなさい。

(1) 酸化数の基本

- 化合物中のOの酸化数は -2 、Hの酸化数は $+1$ 。
- イオンの酸化数はその価数と等しい。
- 化合物中の酸化数の合計は 0 になる。

従って

- KMnO_4 , MnO_2 , MnSO_4 におけるMnの酸化数は順に $+7$ 、 $+4$ 、 $+2$ となる。
- CH_4 , $(\text{COOH})_2$, CO , CO_2 におけるCの酸化数は、順に -4 、 $+3$ 、 $+2$ 、 $+4$ となる。

(2) シュウ酸と過マンガン酸イオンの酸化還元反応



酸化数 $+3 \times 2$ 酸化数 $+4 \times 2$ 電子2個を放出



酸化数 $+7$ 酸化数 $+2$ 電子5個を受容

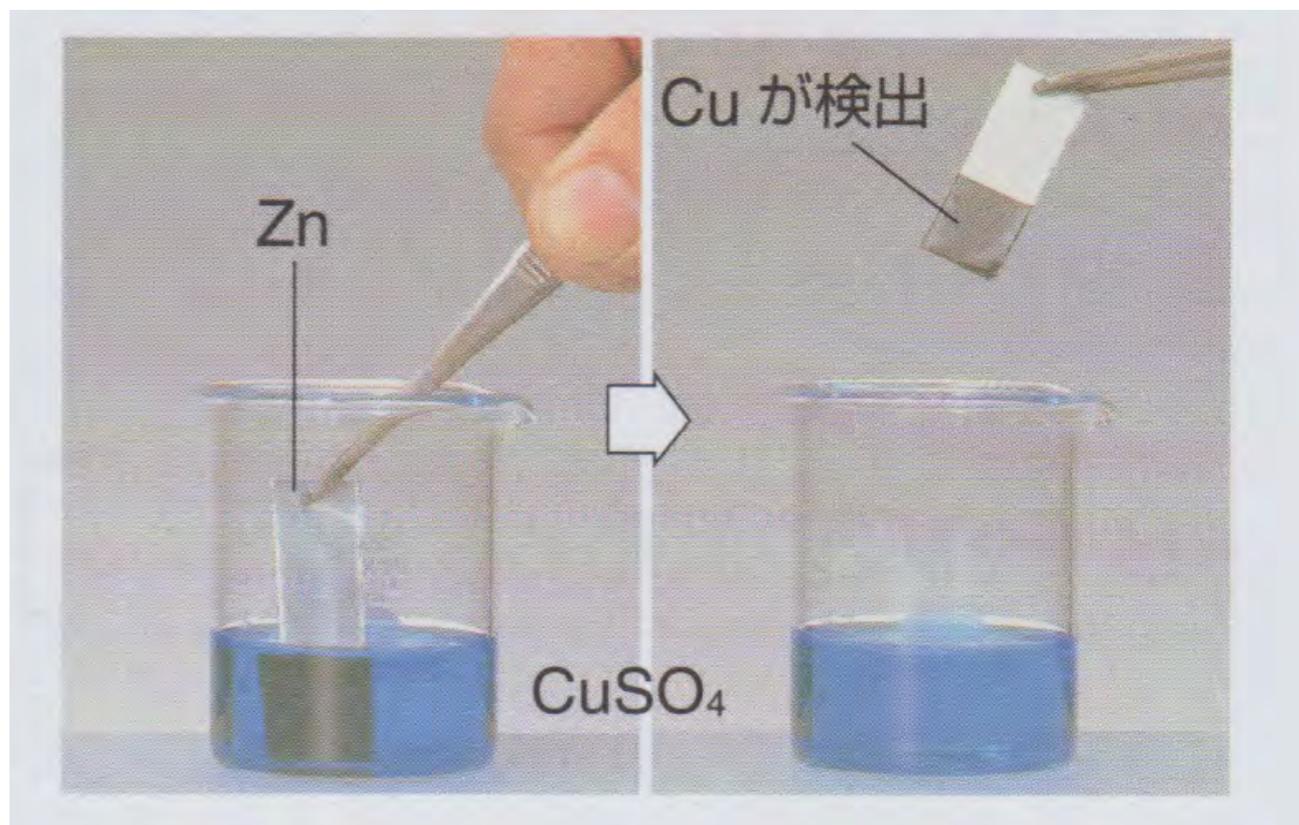
$$2 \times 0.5 (\text{e}^-/\text{mol}) \times 10 = 5 \times 0.1 (\text{e}^-/\text{mol}) \times X$$

$$X = 10/0.5 = 20 (\text{mL})$$

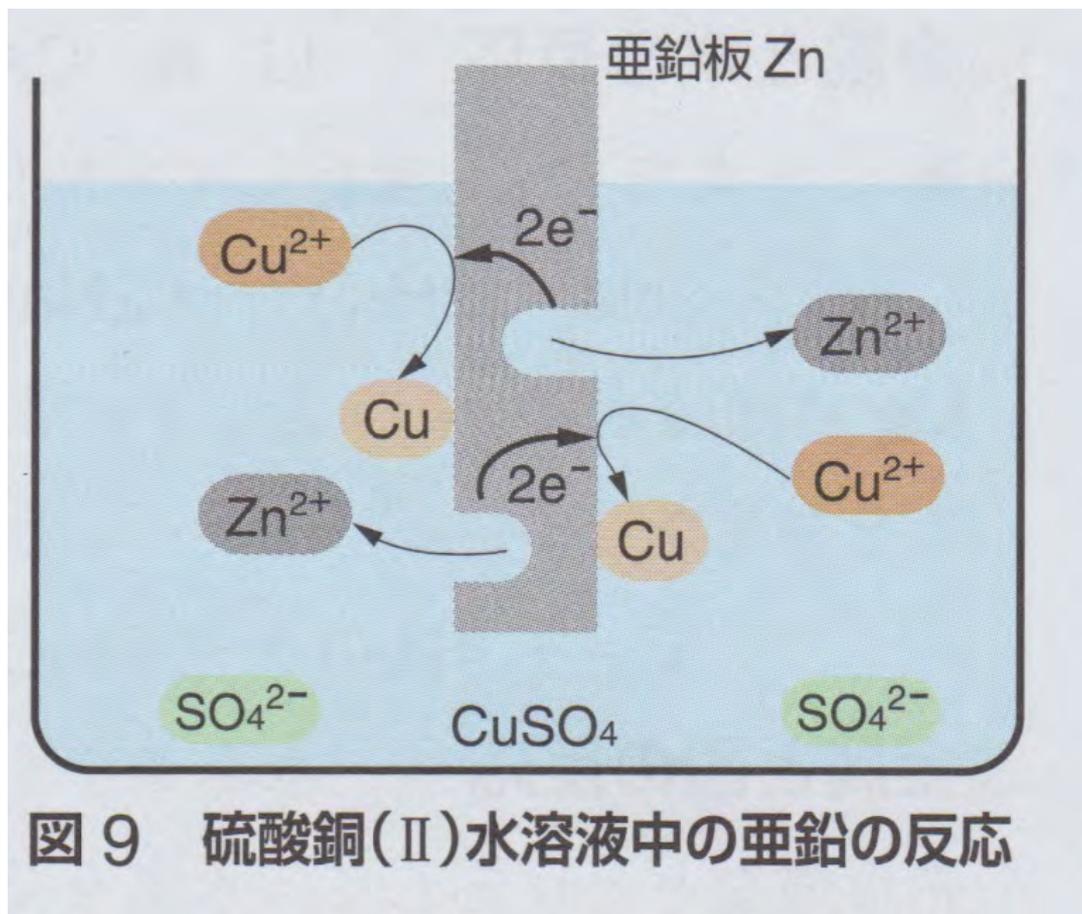
酸化還元反応の起こりやすさ

- 銅(II)イオン Cu^{2+} を含む水溶液に亜鉛 Zn の金属板を入れると、亜鉛は溶けて亜鉛イオン Zn^{2+} となり、銅(II)イオンは金属の銅 Cu になる。
- $\text{Zn} + \text{Cu}^{2+} \rightarrow \text{Zn}^{2+} + \text{Cu}$
- この反応から、亜鉛は銅よりも陽イオンになりやすく、イオン化傾向が大きいことがわかる。
- 亜鉛 Zn は電子を失うので酸化され、還元剤として働き、銅イオン Cu^{2+} は電子を受け取るので還元され、酸化剤として働いている。

銅(II)イオン Cu^{2+} を含む水溶液に亜鉛 Zn の金属板を入れると、亜鉛は溶けて亜鉛イオン Zn^{2+} となり、銅(II)イオンは金属の銅 Cu になる。



硫酸銅水溶液中の亜鉛の反応



主な金属のイオン化列

イオン化傾向の大小

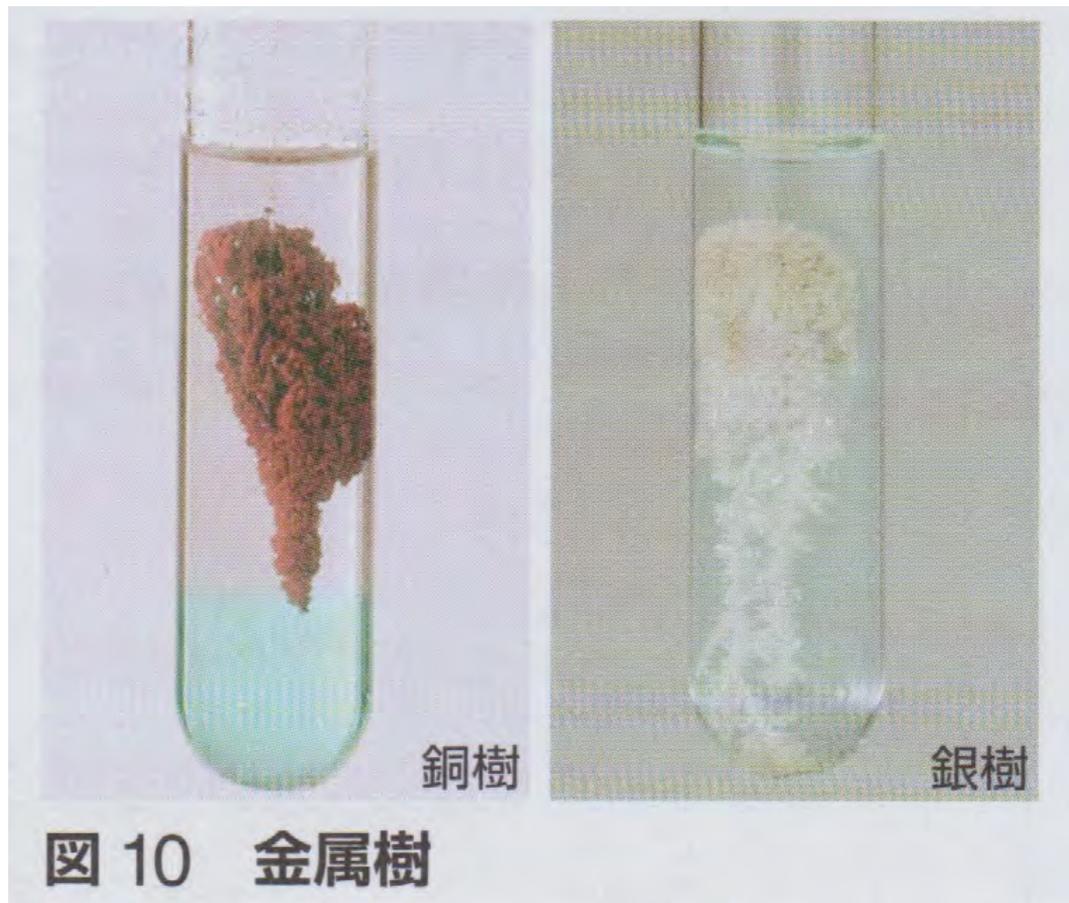
Li, K, Ca, Na, Mg, Al, Zn, Fe, Ni, Sn, Pb, H₂,
続いて Cu, Hg, Ag, Pt, Au

大 ←————→ 小

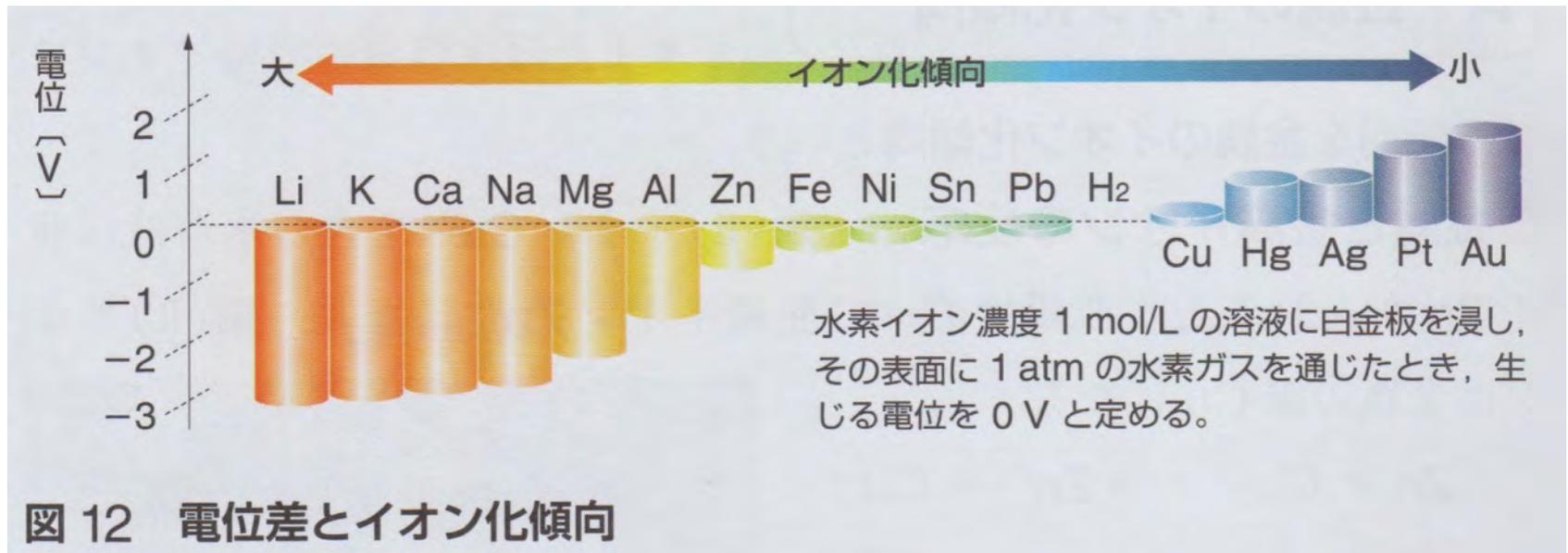
その単体は電子を他に与えて、陽イオンになりやすく、酸化されやすい。
その陽イオンは安定。

その陽イオンは電子を受け取って、単体の金属に戻りやすい。
その単体は酸化されにくく、安定。

金属樹：金属イオンを含む水溶液にそれよりイオン化傾向の大きい金属を入れると、イオン化傾向の大きな金属は陽イオンとなり、イオン化傾向の小さな金属は析出し金属樹となる。



電位差とイオン化傾向：金属をその金属イオンを含む電解質水溶液に浸すと金属と水溶液の間に電位差が生じる。その電位が低いほど陽イオンになりやすい。



金属の反応性

イオン化傾向の大きい金属ほど
電子を失って陽イオンになりやすく、
還元作用が強いので、
空気・水・酸などと激しく反応する。

例えば **Li, K, Ca, Na** など。

金属と水の反応

Li, K, Ca, Na などのイオン化傾向の大きい金属は、常温でも水と反応して水酸化物となり、このとき水素 (H₂) を発生する。

$\text{H}_2\text{O} \rightleftharpoons \text{H}^+ + \text{OH}^-$: 左方向に偏っている。

$\text{Na} \rightarrow \text{Na}^+ + \text{e}^-$: \rightarrow 一方的に進む。

$\text{H}^+ + \text{e}^- \rightarrow \frac{1}{2} \text{H}_2$ ↑揮散 : \rightarrow 一方的に進む。

H⁺ が減るので、水の電離が進み、OH⁻ も増える。

$\text{Na}^+ + \text{OH}^- \rightleftharpoons \text{NaOH}$: 水中では左方向に偏っている。

Mg, Al, Zn, Fe と水の反応



沸騰水中



高温水蒸気中



高温水蒸気中

金属と酸の反応

水素よりイオン化傾向の大きい金属は、希硫酸や希塩酸と反応して、**水素を発生させる。**



水素よりイオン化傾向の小さいCu, Hg, Agなどは、酸化作用の強い加熱した硫酸や硝酸とは反応して溶けるが、**水素は発生しない。**（**水素イオンを還元できない。**）



Pt, Au は王水（濃硝酸・濃塩酸=1:3）に溶ける。

金属単体の反応性

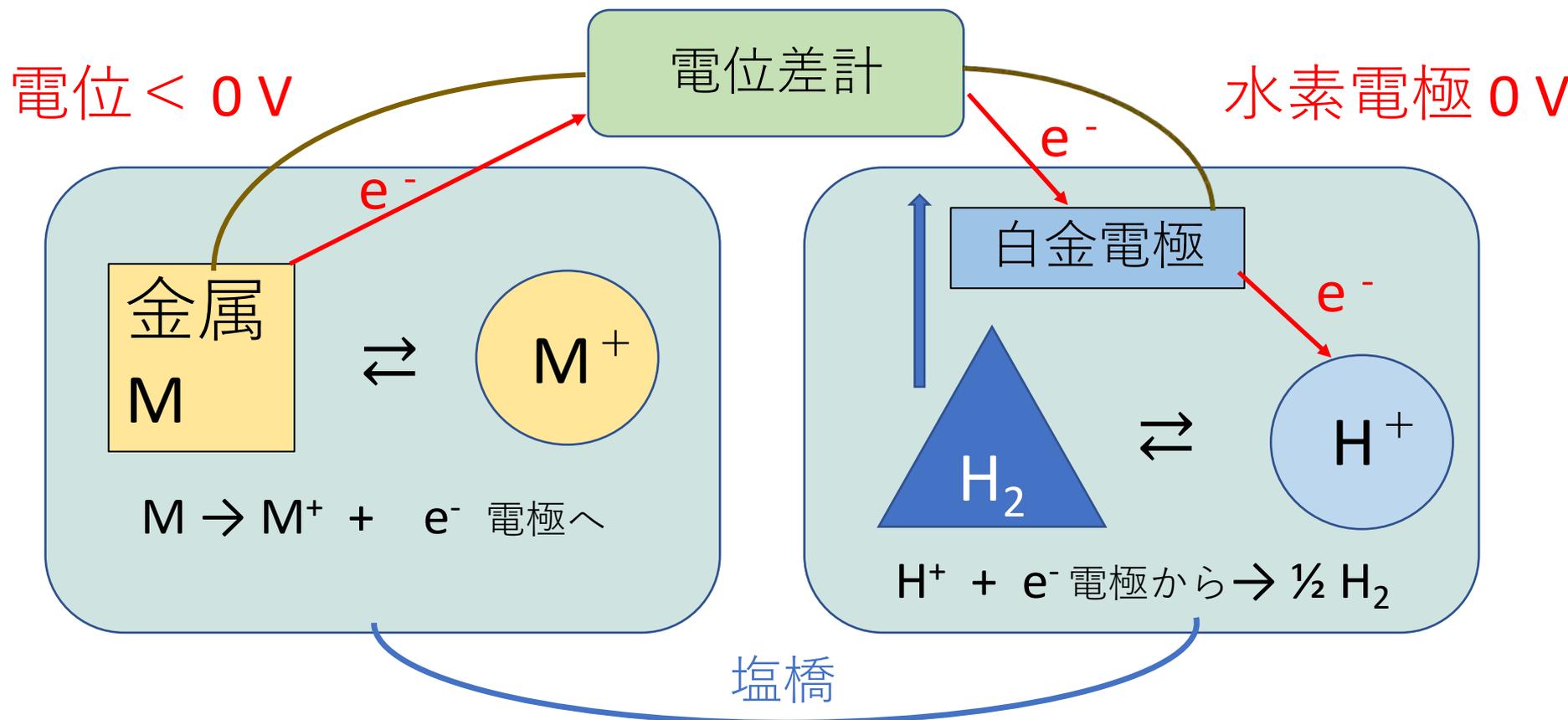
		イオン化傾向															
		大 ←								→ 小							
		Li	K		Mg	Al	Zn	Fe	Ni	Sn	Pb	(H ₂)	Cu	Hg	Ag	Pt	Au
		Ca	Na														
水との反応	常温の水と反応する	H ₂ ↑															
	沸騰水と反応する			H ₂ ↑													
	高温の水蒸気と反応する					H ₂ ↑											
酸との反応	希硫酸・塩酸に溶ける*								H ₂ ↑								
	熱濃硫酸・硝酸に溶ける**																
	王水に溶ける																
乾燥空気との反応	常温ですぐ酸化される				常温で表面に酸化被膜ができる												
	加熱により酸化される																
自然界での産出状態	化合物として存在																
												単体として存在					

* Pbは、水に難溶のPbCl₂やPbSO₄をつくるため、塩酸や希硫酸にはほとんど溶けない。

** Al, Feなどは、不動態をつくるため、濃硝酸には溶けない。

図 13 金属単体の反応性

金属のイオン化傾向の基準 標準電極電位



金属Mのイオン化傾向が H_2 よりも大きい場合、電子は金属Mから水素に接した白金電極に流れる。水素電極の方が電位が高い。

水素電極を基準とした 各金属のイオン化傾向の数値化

標準水素電極 (この電位を0Vとする。)

多孔質の白金電極を 1 mol/L の水素イオンの水溶液に浸し、この表面に25°C (298 K) で 1気圧 (100KPa) の水素を流したものの。

$2 \text{H}^+ (\text{aq}) + 2 \text{e}^- \rightleftharpoons \text{H}_2 (\text{g})$ の反応が電極上で起こる。

この水素電極と、別の金属と 1 mol/L の金属イオンが平衡状態にある半電池中の電極を結びつけて電池を組み立て、その起電力を測定する。

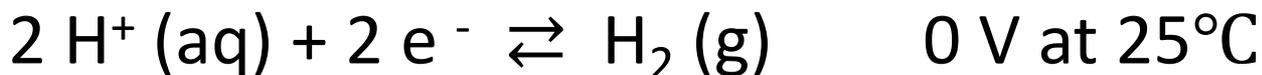
この起電力 (電位差) を標準電極電位といい、イオン化傾向の基準となる。

基準電極

(参照電極・比較電極・照合電極ともいう)

水素電極は取り扱いが不便なため、実際には銀・塩化銀電極やカロメル電極が用いられる。

水素電極



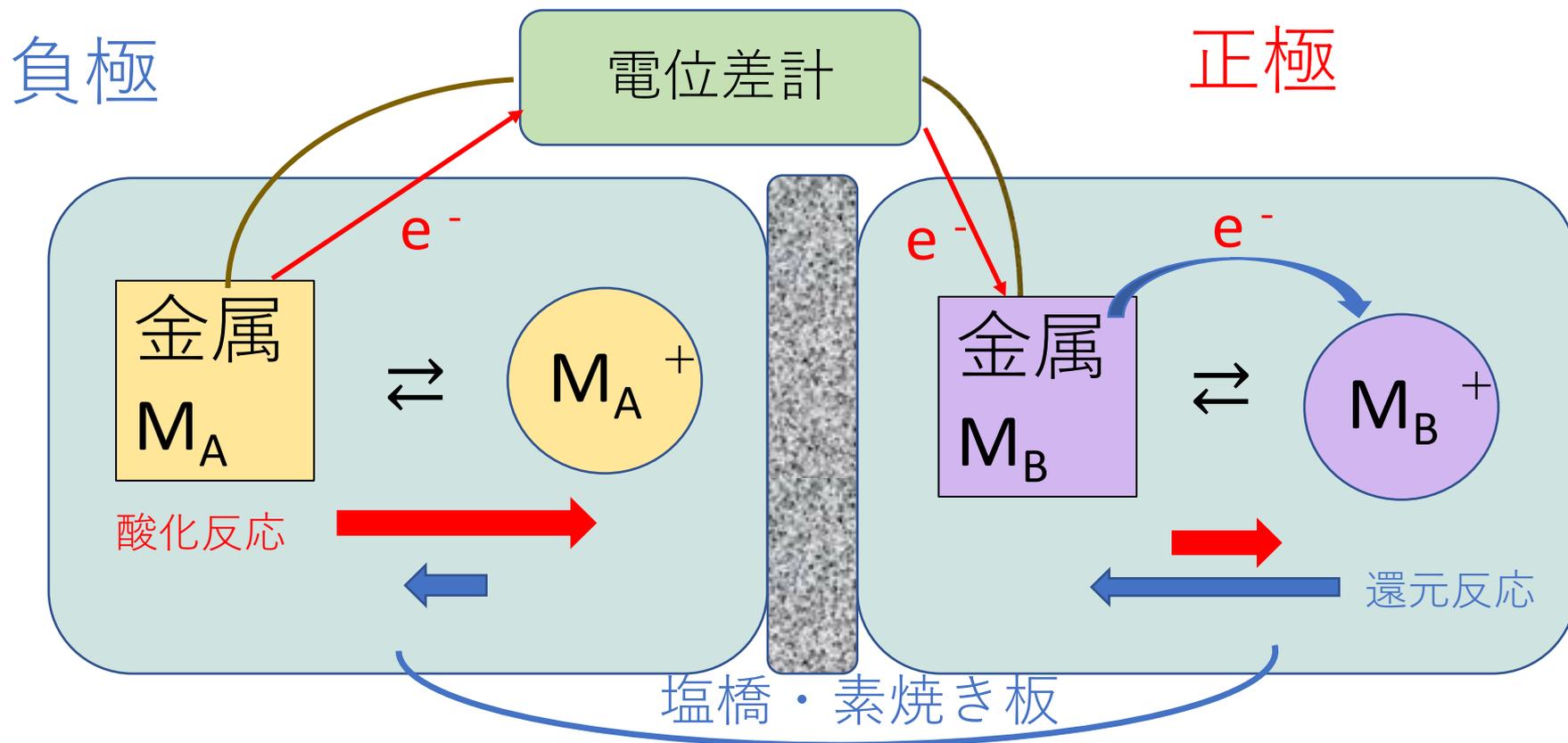
銀・塩化銀電極 (飽和KCl 使用の場合)



カロメル電極 (飽和KCl 使用の場合)

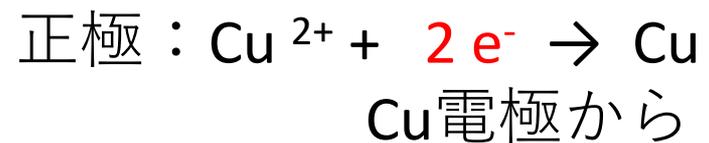
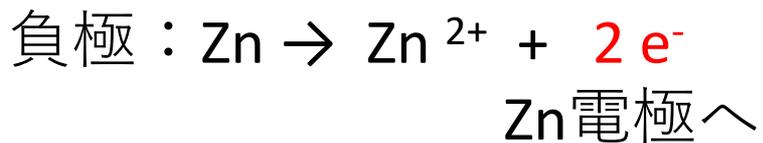
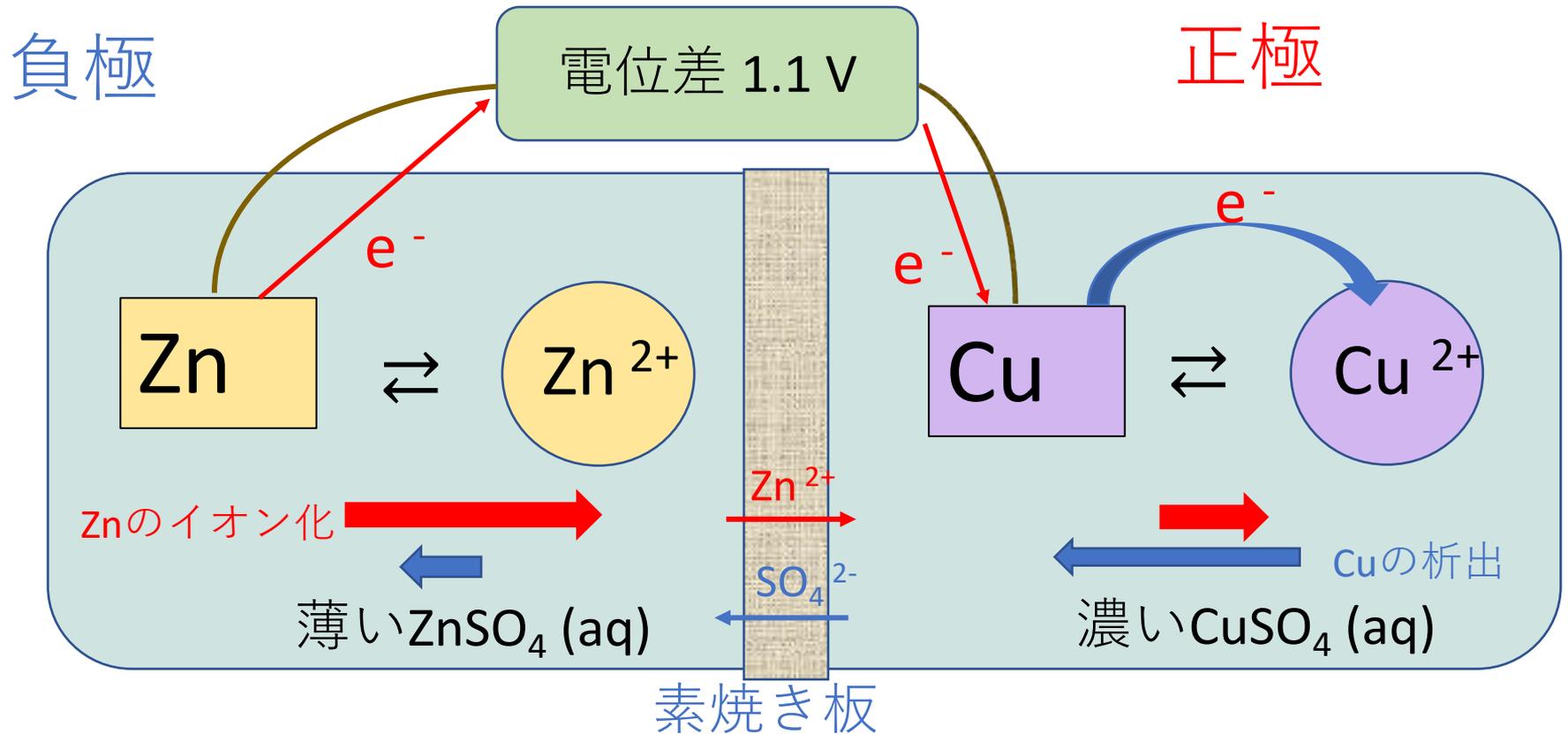


酸化還元反応とエネルギー 電池の原理

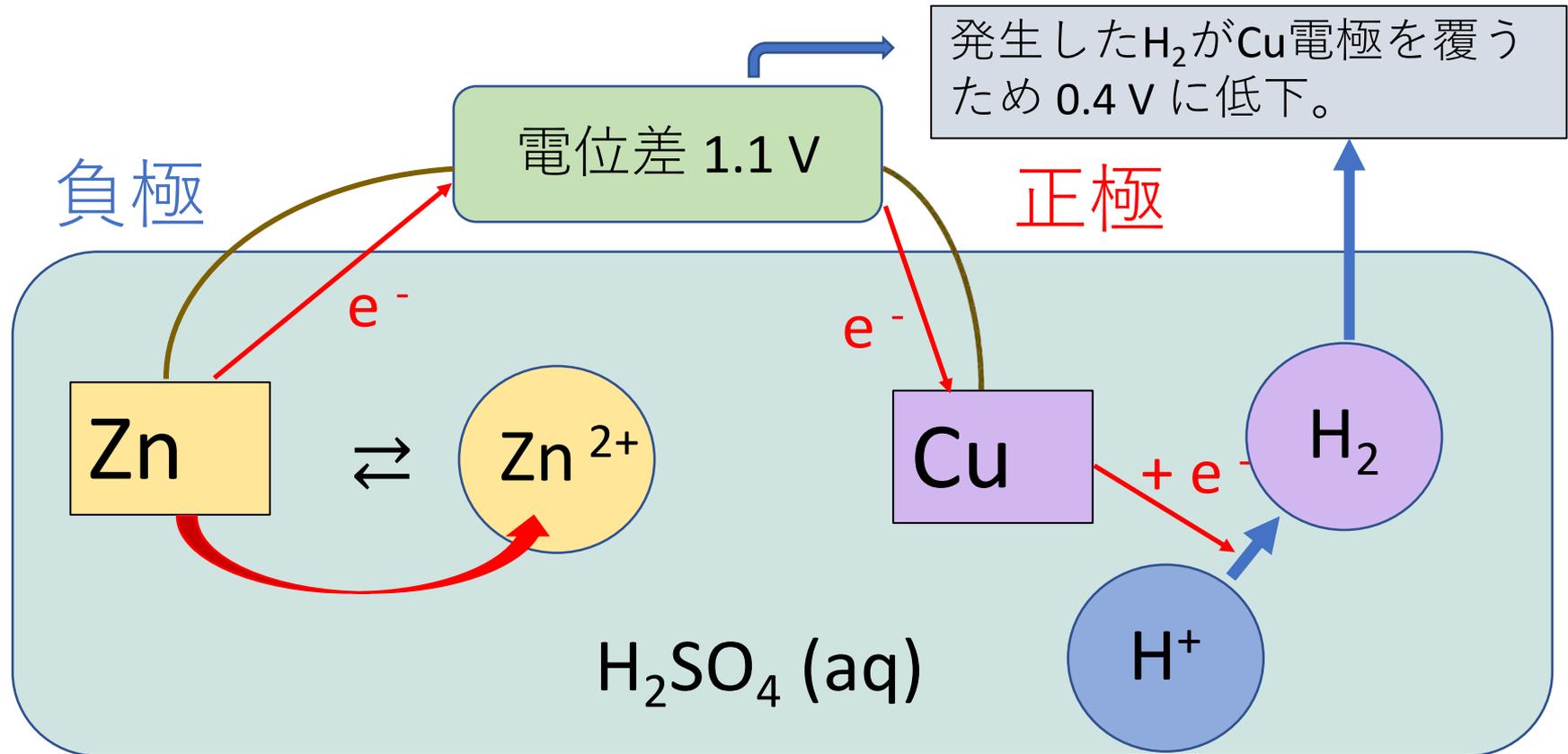


イオン化傾向が異なる2つの金属をそれぞれの陽イオンと平衡に至らせた半電池をつくり、これらの半電池を電気的につなげると、イオン化傾向の高い金属 M_A から、低い方の金属 M_B に電子が流れるため、イオン化電極の低い金属 M_B の方が正極 (+ 極) となる。

ダニエル電池 (1836)



ボルタ電池 (世界初の電池 1800)



負極 : $Zn \rightarrow Zn^{2+} + 2e^-$
Zn 電極に電子が残る

正極 : $2H^+ + 2e^- \rightarrow H_2$
Cu はH⁺ に電子を供給

アレッサンドロ・ボルタ

(イタリア 1745 – 1827)

- 沼に発生する可燃性のガスがメタンであることを発見。
- 静電気をとるための器具、電気盆、を改良・紹介。
- 食塩水を浸した紙に2種類の金属を接触させると電気が流れることを発見。
- 電圧 (V) と電荷 (Q) を区別。
- 亜鉛と銅の電極からなるボルタの電池を発明 (1800)

さまざまな実用電池 p.223-225

- **一次電池**：放電のみで充電できない。
マンガン乾電池、アルカリマンガン乾電池
- **二次電池**：充電ができる電池
鉛蓄電池、リチウムイオン電池
- **燃料電池**：水素のような燃料がもつ化学エネルギーを電気エネルギーとして取り出す。
リン酸型燃料電池、アルカリ型燃料電池、
固体高分子型燃料電池

マンガン乾電池と鉛蓄電池の構造



亜鉛の筒は容器を兼ねた負極で、放電すると亜鉛イオンが溶けだす。電子は、電池の外部の導線を通して正極の炭素棒に移動し、MnO₂は還元される。

図 17 マンガン乾電池の構造

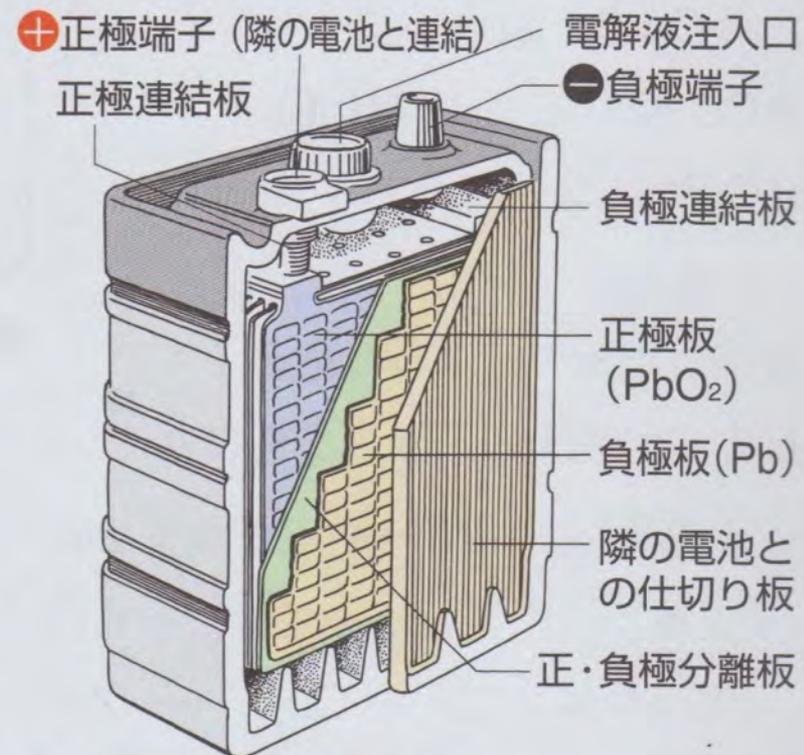


図 18 鉛蓄電池の構造

電気分解

- 電気エネルギーを与えて強制的に酸化還元反応を起こすことを電気分解という。
- このような電気分解では、電池などの直流電源の負極につないだ電極を陰極、正極につないだ電極を陽極という。
- 陰極では電子が供給されて還元反応が起こり、
- 陽極では電子が奪われて、酸化反応が起こる。
- すなわち、電池とは反対の反応が起こる。

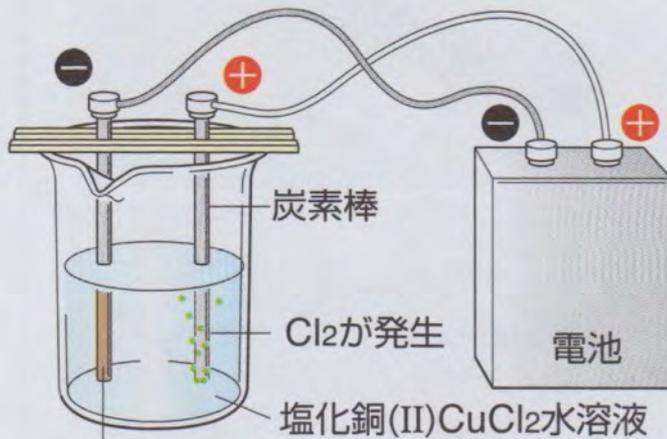
塩化銅(II) 水溶液の電気分解

• 塩化銅水溶液に2本の炭素棒を入れて、電気分解すると、陰極では銅が析出し、陽極では塩素が発生する。

• 陰極： $\text{Cu}^{2+} + 2\text{e}^- \rightarrow \text{Cu}$ (還元)

• 陽極： $2\text{Cl}^- \rightarrow \text{Cl}_2 + 2\text{e}^-$ (酸化)

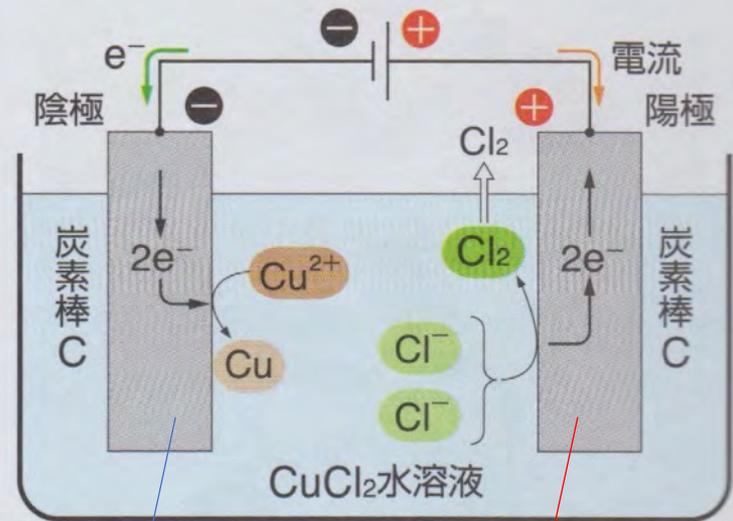
塩化銅(II)水溶液の電気分解



Cuが付着

銅(II)イオンは陰極から電子を受け取り、塩化物イオンは陽極に電子を与える。

図 19 塩化銅(II)水溶液の電気分解



陽極から塩素が発生し、陰極に銅が付着する。

還元反応

酸化反応

電池と



電気分解

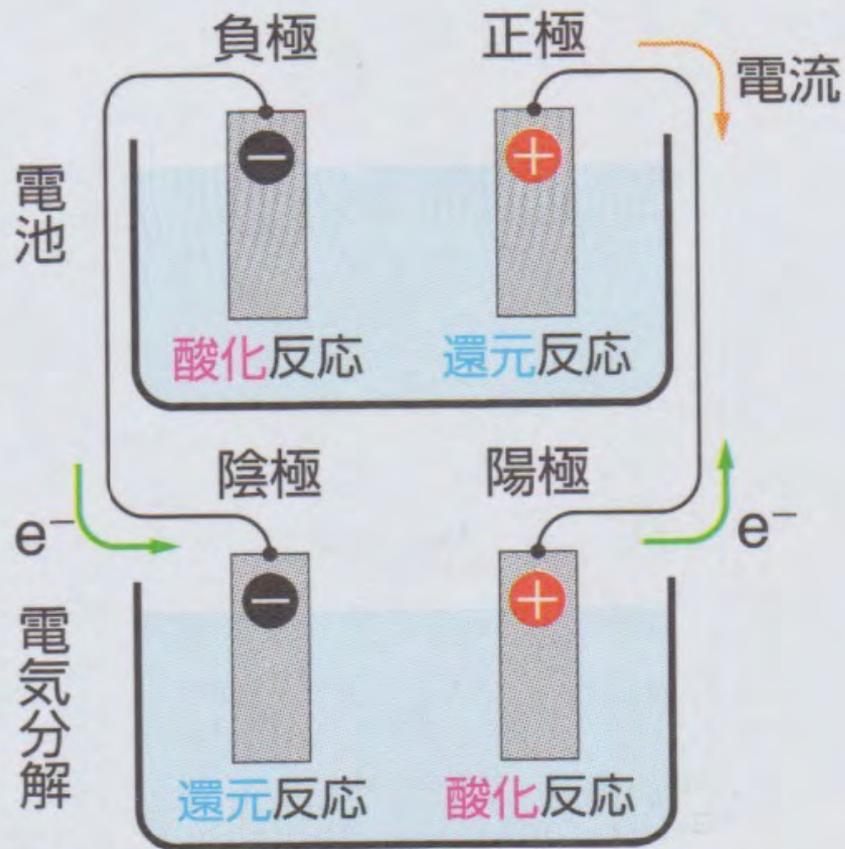


図 20 電気分解と電池

電極の呼び方が違うので注意。

陰極で起こる反応 (1)

水素よりイオン化傾向の大きい K ~ Pb の陽イオンおよび水素イオンが陰極の周りに存在すると、水素が最もイオン化傾向が小さいため、中性から塩基性では、



酸性では、



ただし、Zn ~ Pb などの金属イオンが高濃度に存在すると、金属イオンが還元され析出する場合がある。

陰極で起こる反応

表2 電極での反応

● 陰極で起こる反応

陰極では、電源から電子が供給されるので還元反応が起こる。

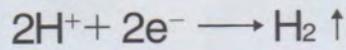
Li	K	Mg	Al	Zn	Fe	Ni	(H ₂)	Cu	Hg	Ag	Pt	Au
Ca	Na											

K ~ Pb の金属イオン, 水素イオン

中性・塩基性

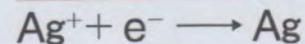
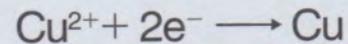


酸性



Cu ~ Au の金属イオン

金属析出



※ Zn ~ Pb などの金属イオンでは、これらの濃度が大きいと、金属イオンが還元され析出する場合がある。



陰極で起こる反応 (2)

水素よりイオン化傾向の小さい **Cu, Hg, Ag, Pt, Au** の陽イオンが陰極の周りに存在すると、**これらの金属が析出する。**

水素イオンよりもこれらの金属イオンの方が電子を受け入れやすく、単体の金属の状態の方が安定なためである。

したがって、水素は発生しない。

陽極で起こる反応 (1)

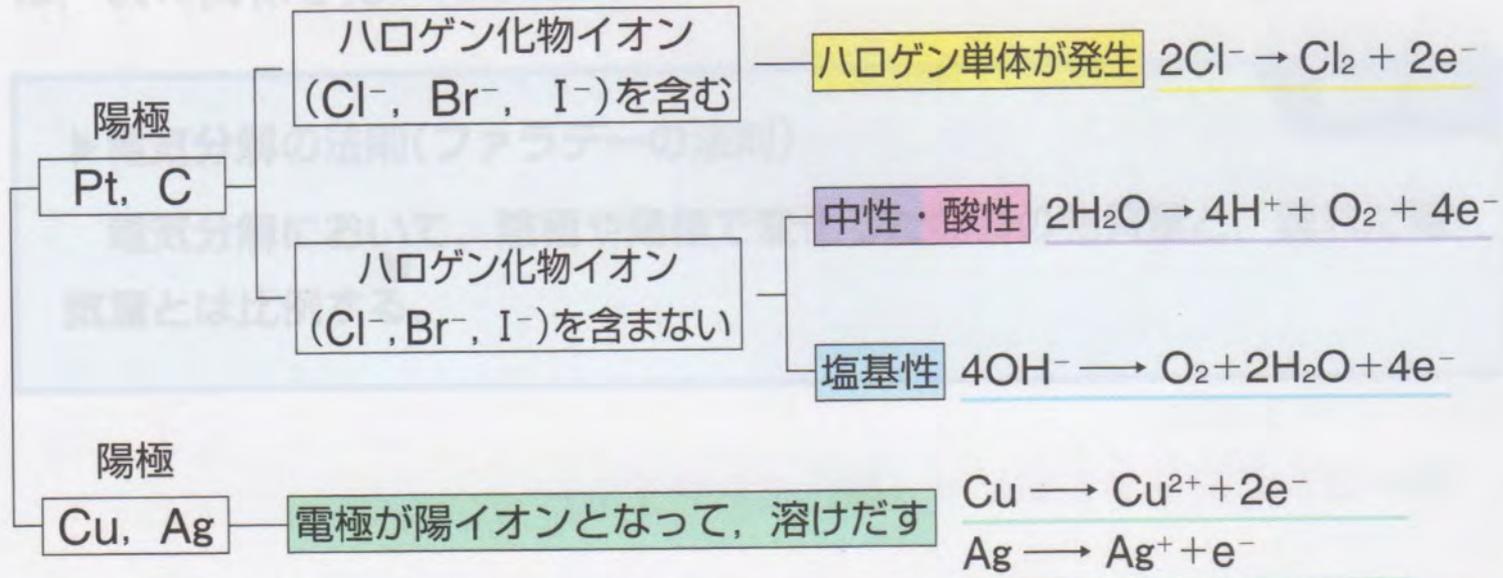
陽極が銅 (Cu) または銀 (Ag) の場合、
電極が陽イオンとなって溶け出す。



陽極で起こる反応

⊕陽極で起こる反応(最初に電極に使われている物質に着目)
陽極では、電子が奪われるので酸化反応が起こる。

酸化されやすさ $I^- > Br^- > Cl^- > OH^- > H_2O \gg SO_4^{2-}, NO_3^-$



陽極で起こる反応 (2)

陽極が白金(Pt) または炭素の場合で、さらに、陽極の周りの溶液が

ハロゲン化物イオン (Cl^- , Br^- , I^-) を含む場合、ハロゲン単体 (Cl_2 , Br_2 , I_2) が発生する。

これは、陰イオンの酸化されやすさを反映している。



陽極で起こる反応 (3)

陽極が白金(Pt) または炭素の場合で、さらに、
陽極の周りの溶液が

ハロゲン化物イオン(Cl^- , Br^- , I^-)を含まない場合、
溶液が中性・酸性ならば (例 CuSO_4 , AgNO_3 等)、

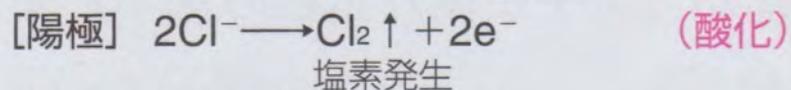
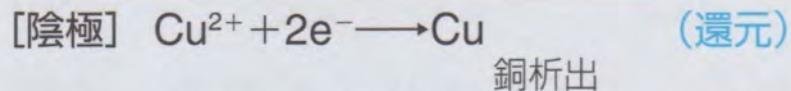
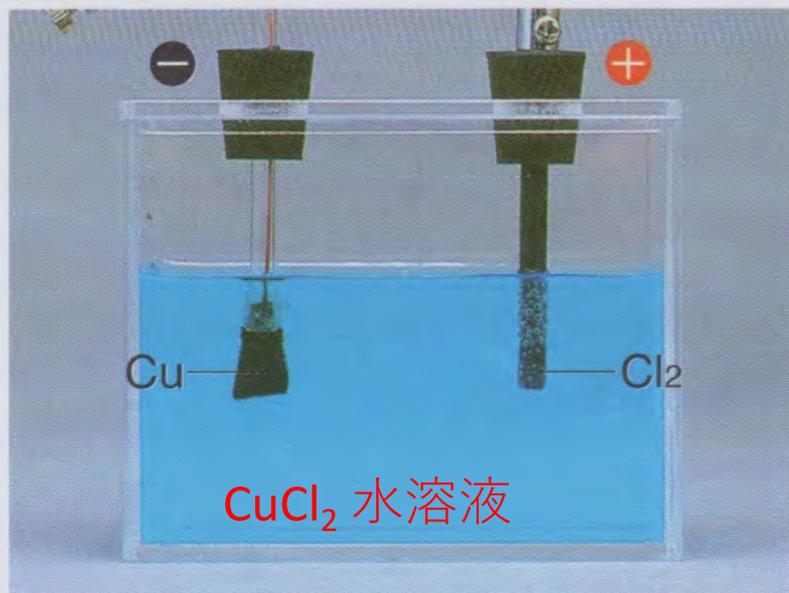


溶液が塩基性ならば (例 NaOH 等)、

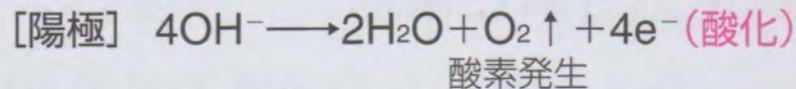
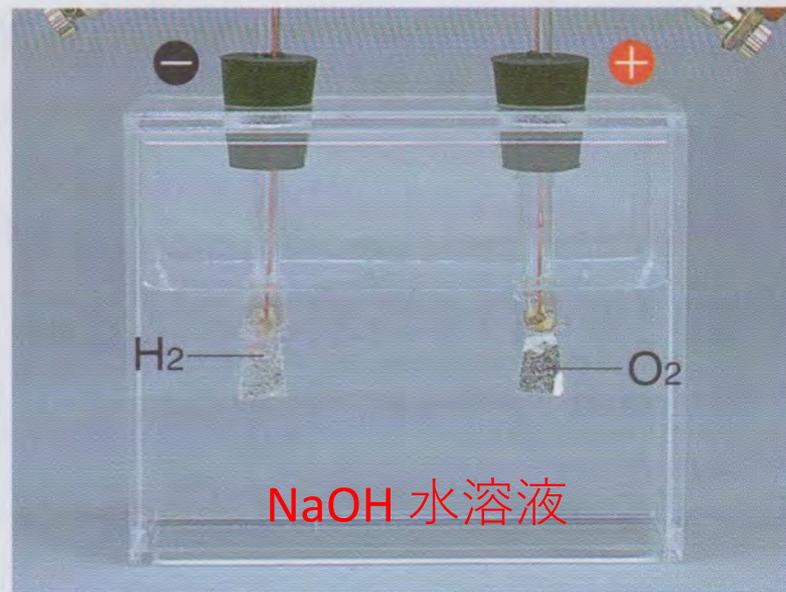


の反応が起こる。

電解質水溶液の電気分解 (1)

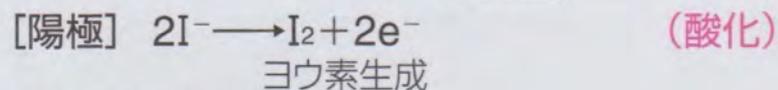
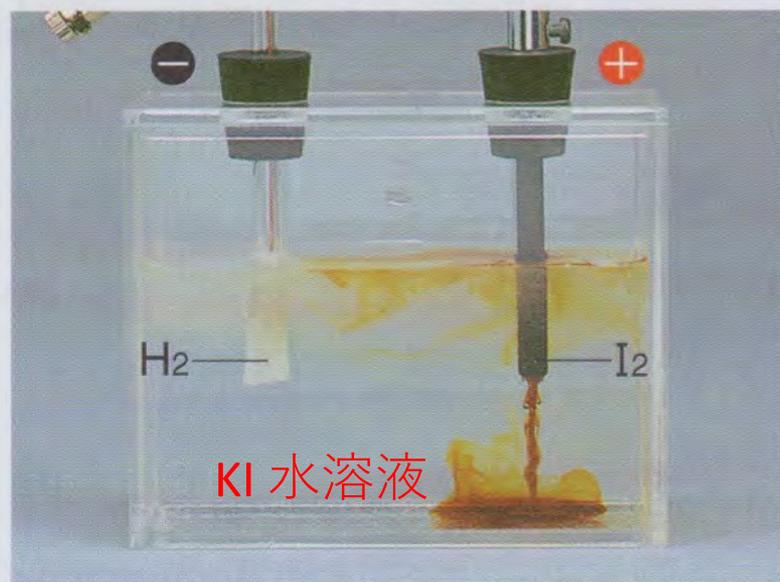


CuCl_2 水溶液 (Pt-C電極)

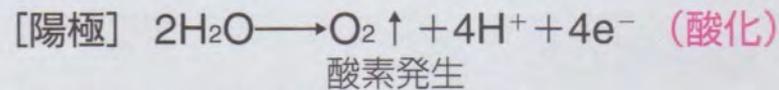
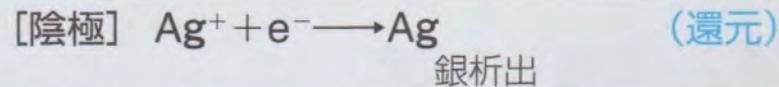
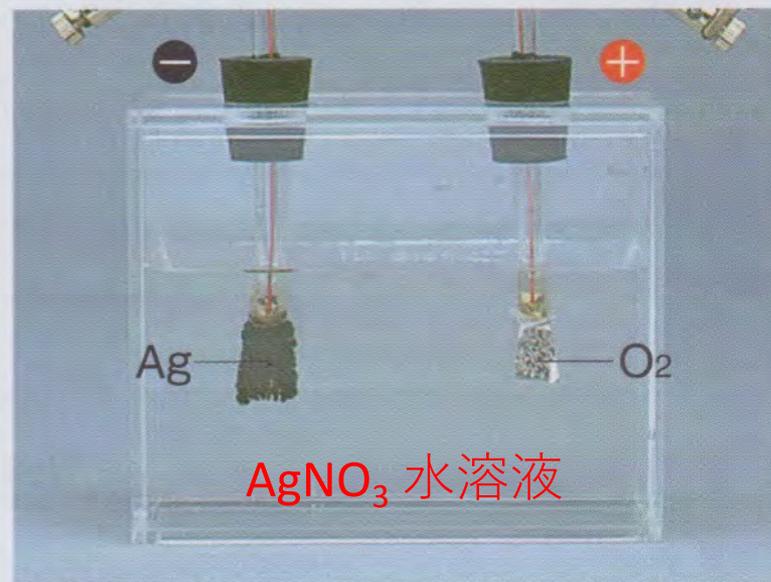


NaOH 水溶液 (Pt-Pt電極)

電解質水溶液の電気分解 (2)

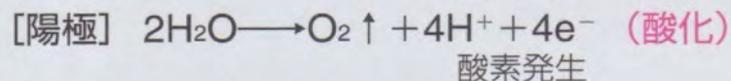
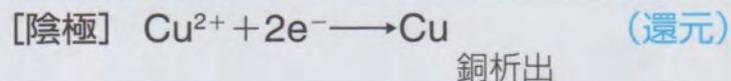
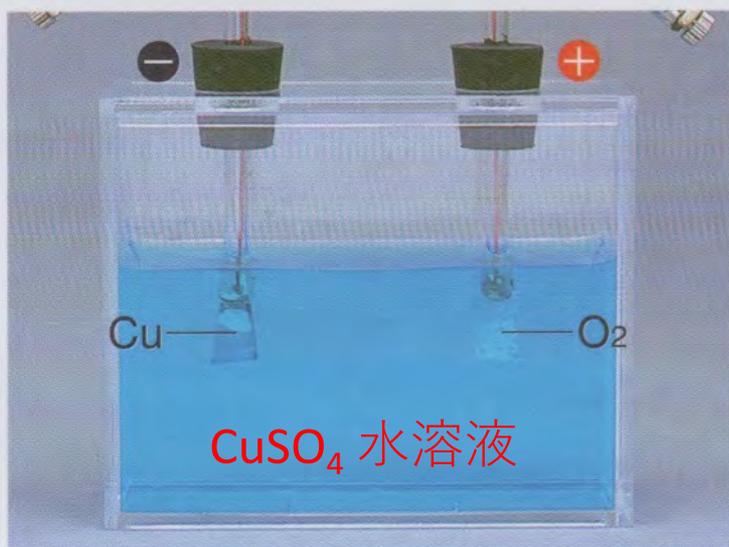


KI 水溶液 (Pt-C電極)

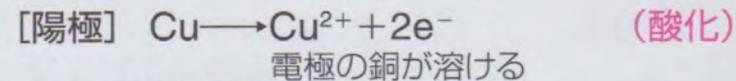


AgNO_3 水溶液 (Pt-Pt電極)

電解質水溶液の電気分解 (3)



CuSO_4 水溶液 (Pt-Pt電極)



CuSO_4 水溶液 (Cu-Cu電極)

図 21 電解質水溶液の電気分解

水酸化ナトリウムの製法

水酸化ナトリウムは塩化ナトリウムを電気分解してつくられる。



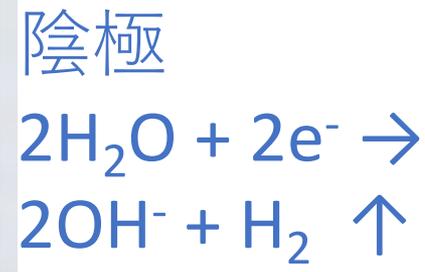
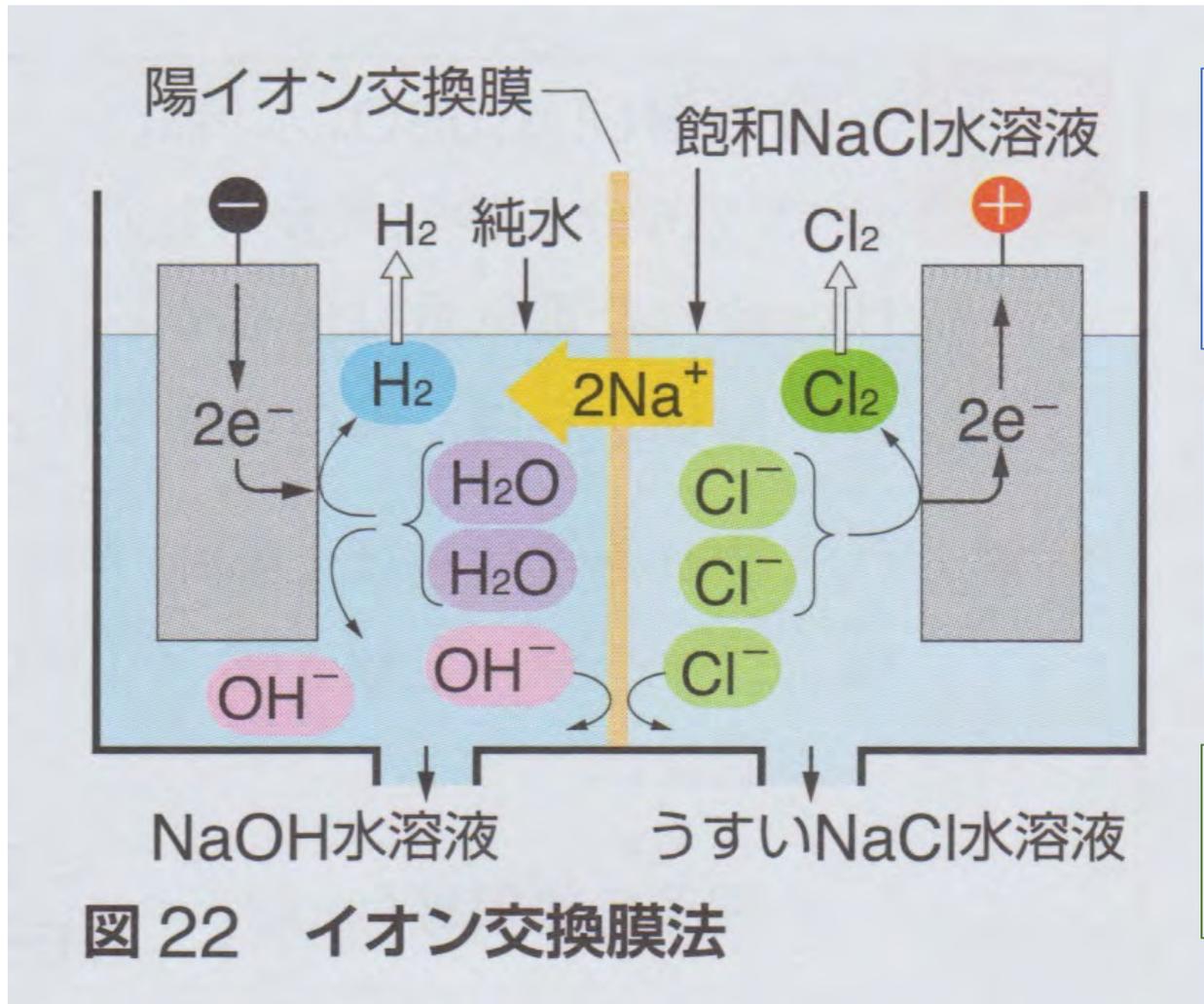
陰極付近には OH^- の荷電を打ち消すために Na^+ も移動してくる。



しかし、 NaOH と Cl_2 が反応するのを防ぐため、陰極のセルと陽極のセルを分離する必要がある。

現在では、その分離のために、陽イオンだけを通過させる陽イオン交換膜が用いられている。

水酸化ナトリウムの製法



陰極セルへ
Na⁺ が移動

電気量と物質質量

CuSO_4 水溶液を白金を電極として電気分解したとき、陰極と陽極の反応式の係数から、電気量と物質質量の間に次の関係がわかる。



2 mol の電子を受け入れ、1 mol の銅が析出。



4 mol の電子を放出し、1 mol の酸素が発生。

電気量とファラデー定数

1 mol の電子がもつ電気量の絶対値は、 $9.65 \times 10^4 \text{ C}$ （クーロン）である。

$9.65 \times 10^4 \text{ C/mol}$ をファラデー定数といい、記号 F で表す。

1 C は、1 A（アンペア）の電流が1秒間流れたときの電気量である。

$$\text{電気量 [C]} = \text{電流 [A]} \times \text{時間 [s]}$$

電気分解の法則

ファラデーの法則(1833)

電気分解において、陰極や陽極で変化した物質の物質質量と、流れた電気量は比例する。例えば、

0.1 [A] の定常電流を30分 = 1800[s]流すと、

$0.1 \times 30 \times 60 = 180$ [C] の電気量に相当し、

$180 / (9.65 \times 10^4) = 1.87 \times 10^{-3}$ [mol]

の電子が関わる酸化反応または還元反応を引き起こす。

マイケル・ファラデー

(Michael Faraday, 1791- 1867)

- イギリスの化学者・物理学者で、電磁気学および電気化学の分野での貢献で知られている。
- 物理学における電磁場の基礎理論を確立。化学者としては、ベンゼンを発見し、塩素の包接水和物を研究し、原始的な形のブンゼンバーナーを発明し、酸化数の体系を提案した。アノード、カソード、電極 (electrode)、イオンといった用語はファラデーが一般化させた。
- ファラデーは貧しい家庭に生まれたため、小学校も中退という教育しか受けておらず、高度な数学などはわからなかったが、科学史上、最も影響を及ぼした科学者の1人とされる。
- 「ロウソクの科学」：青少年向けの科学の講義。
- 岩波文庫、角川文庫などから出版されています。ぜひ読んでください。「ロウソクの科学が教えてくれること」サイエンス新書などの解説本もあります。

出席確認メールのお願い

出席確認のため、**授業終了後、当日中に**筒木宛にメールを送ってください。送り先は；

kiyosi.tutuki@icloud.com

メールのタイトルは、「**入門化学出席確認、学籍番号、氏名**」としてください。

メールの本文には、簡単で良いので**授業の感想**などを書いてください。

7月19日課題 7月24日締切

白金電極を用いて、硝酸銀 (AgNO_3) 溶液を0.1Aの一定電流で60分電気分解した。(Ag: 107.9)

- (1) 流れた電気量は何 C (クーロン)か？
- (2) 陰極と陽極で生成する物質はそれぞれ何か？
- (3) 陰極に生成(析出)する物質の物質質量 (mol) と質量 (g) を求めよ。

なおファラデー定数は $9.65 \times 10^4 \text{ C / mol}$ である。

7月のチョウ

クジャクチョウ、
ヤマキマダラヒカゲ、

ジャノメチョウ
フタスジチョウ

